

ジャータカの生命観

渡辺愛子

はじめに

膨大な仏教典籍の中にジャータカと呼ばれる一連の經典群がある。

その存在は早くから知られ、我が国でも「三宝絵詞」「今昔物語」「宇治拾遺物語」を始めとする中世説話文学の中に数多く見られ、謡曲の題材にも取り入れられている。

物語の内容が広く一般に知られ、日本文化にすっかり定着しているために、日本古来のものと考えられているものも多い。その起源が、実は遠いインドの仏典にあると知って、意外に思われるという場面にしばしば出合う。

また、ヨーロッパでは、「イソップ物語」を筆頭に、中世キリスト教の二大説話集、「Legenda Aurea」〔Gesta Romanorum〕⁽²⁾、同じく中世キリスト教の聖者伝「バルラムとヨサファット」などに材料を提供してきた。

もつとも、これはジャータカのみに限定されるべきものではなく、広く他の仏典も含まれるが、高邁な教理よりは、むしろ日常生活に根ざした内容を主とするジャータカおよび本縁部の經典が注目されるのである。

ちなみに「バルラムとヨサファット」は、後にジェスイット教団のフランシスコ・ザビエルによって、我が国にもたらされ、天正十九年（一五九二）、九州、加津佐学林から出版されている。

「⁵聖徒の御作業の内抜書」と題する。邦訳はよく洗練されていて、文中、「菩提」「発心」「無常」「本尊」などの仏教語が散見され、わずかに施されたふりがなは、智眼(ちげん)不犯(ふぼん)莊嚴(しょうごん)のように呉音が目立ち、キリスト教の聖者伝でありながら、仏教的な雰囲気がある。邦訳に携わった日本人の教養に由来するものであろう。ところで、我が国では一五八七年に、キリスト教禁止令が出されている。その四年後に九州で刊行された本書には、並々ならぬ経緯が秘められているよう。

三百年余の後、それが実は仏陀釈尊伝と深い関わりを持つことが明かになるうとは、その頃の誰が知り得たであろうか。歴史の妙としか言い様がない。

また「*Legenda Aurea*」「*Gesta Romanorum*」が、⁴チョーサーやシェイクスピアに素材を提供していることは、よく知られている。

我が国でも、芥川竜之介が、「きりしとほろ上人伝」や「奉教人の死」の素材としてこれを活用している。

さらに、芥川は、⁶仏典から「蜘蛛の糸」を、⁷中国、唐代の伝奇から「杜子春」を作品化した。

彼は広く東西の古典を涉獵し、それに基づいて創作の筆を進めたのであったが、「今昔物語」や「宇治拾遺物語」が仏典に由来することは承知していても、前記のキリスト教説話集も、実は仏典と関わりを持っていたことまで知っていたであろうか。

いずれにせよ、「バルラムとヨサファット」「*Legenda Aurea*」「*Gesta Romanorum*」等を通じて、二六〇〇年の昔に、インドに生まれた仏教が、地続きの西洋キリスト教世界の歴史の中に、姿を変えて命脈を保ち続け、長い道程を経て我が国に到達し、今日、その経路が明らかにされつつある。

歴史の不可思議に言葉を失う。

先学の業績の賜であることはいまでもないが、文明の発達により、地球が狭くなった結果でもある。

今日に生きる我々は、これらの事実をどう理解し、何を学びとるべきか、これが最も重要な課題である。

与えられたテキストであるジャータカを読み進めることによって、仏教の真理の一端に触れたい。

そして、それが真理である限り、「仏教の」という形容詞に固執する必要が無くなるはずである。

地球が狭くなり、宗教を異にする人々との出会いの機会がますます頻繁となる。

「聖戦」という名の湾岸戦争をはじめ、各地に頻発する民族紛争も宗教と無関係ではない。

自己の信仰を深めると同時に、他のそれを蔑視したり、恐れたりする事なく、正しく理解する努力を時代は強く要請している。

仏教も最初は当時のインドにおける新興の宗教であった。

日本でも仏教は最初は異国の宗教であった。浄土真宗もまた南都・北嶺の仏教に対する一種のプロテストであり、宗祖・親鸞とその師・法然は朝廷の断罪により遠流となった。

いささか私事にわたるが、夫の祖父は、禅宗の地・岩手に念仏の教えを伝え「人心を惑わせた罪」により投獄されている。つい明治のことである。

そして今「仏教」を装うオウム真理教の引き起こした一連の事件が、病める現代に警鐘を鳴らしている。

これらの事実を視野に入れるとき、仏教の歴史の長さに安閑として、座視することは許されない。

専門の学者による精緻な仏教研究とともに、仏教に直接深い関わりを持たない一般の人々、さらに、異なった宗教の人々にも仏教理解を容易にしてゆくことが、現在、極めて重要な社会的要請ではあるまいか。

以上の観点からジャータカの持つ意義を探ってゆく。

ジャータカ研究に関しては、既に、干潟龍祥博士の「本生経類の思想史的研究」⁽⁸⁾によって、菩薩思想の源流としてのジャータカが明らかにされた。続いて、先学の諸研究が既に多数、公にされている。

ここでは、筆者の力量に応じて落穂拾いの収穫をまとめてみたい。

ジャータカの語義

jataka は、サンスクリット語基 jan (生む)・ka (過去受動分詞を作る語尾)・ka (...に属するもの) という成立ちをしている。従ってその意味は「生まれてあった時のこと」となる。

漢訳者は「本生経」または単に「生経」と訳している。「本生経」の「本」は「根本」「本来」という意味ではなく、単に時間的過去を表わすものである。すなわち過去の生、「前世の物語」という意味である。

經典の中には、釈尊の前生をはじめ、仏弟子たちの前生、あるいはまた、実在の人物ばかりでなく、創作された多くの菩薩たちの前生、一般在家信者の前生、その他、人間に限らず、登場する生きとし生けるものすべての前生が、数多く語られる。

その内、ジャータカと呼ばれるのは、仏陀釈尊の前生物語に限られる。仏の前生という点からいえば、「大無量寿経」は阿弥陀仏の前生である法蔵菩薩の物語であるが、これをジャータカとは呼ばない。

歴史上の人物であるゴータマ・シッタールタが悟りに到達して仏陀に成ったという事実を、当時の人々は極めて稀有なことと捉えた。それを遠い過去世からの数知れぬ善業の集積の結果と受けとめた。

そのゴータマ・シッタールタの過去世の善業の物語が一定の枠組⁽¹⁾のもとにまとめられ、五四七の物語集として、南伝大蔵経、小部經典中に収められている。

もっとも、個々の物語に登場する前生での釈尊以外の登場人物が、今生の誰であったかが明らかにされるので、正確を期するためには、ジャータカは釈尊を中心に、その周囲の人々を含む前生物語集と言うべきであろう。

なお、南伝大蔵経などのようにまとまったジャータカばかりでなく、一般の經典の中にも、釈尊の前生物語は無数

にちりばめられている。

業と輪廻

ジャータカの扱って立つ基盤は、業と輪廻である。

「業」(Karma)とは、狭義において、一言で言えば、「行為」(身、語、意の三つの行為)であり、その業の内容に従って、善因は楽果を、悪因は苦果をもたらし、そしてその果は、自業自得である。

「輪廻」(samsara)とは、「流れる」ことで、命は死をもって断たれず、生死を繰り返し、無限に流れ続けることを意味する。

人が果てしなく生死を繰り返すさまを、車輪の回る様子と捉えたのは漢訳者である。車輪には始めも終わりもなく、ただひたすら回るのである。

命を死をもって終わりとしなくて、川の「流れ」のように続き、海に到り、雨となって再び川に注ぐ、永遠の循環と捉えた、古代インド人の直観に驚くほかない。

死の恐怖が生み出した、古代人のたわいない夢物語としてかたづけすることはできない。発端は確かに「死の恐怖」であったかもしれない。(「死の恐怖」は現代人といえども解決済みではない。)

そして、前生や来生の存在を物理的に証明することができないという点では「夢物語」と言えるかもしれない。だが、仮にこれを夢物語としても、その果たした役割の何と大きなことか。

今日、仏教国として名高いスリランカ⁽¹³⁾において、ジャータカは各家庭、学校、寺院で繰り返し教えられ、社会倫理の基盤を成している。

筆者のスリランカ旅行中の見聞を記し、参考に供したい。

島の南部の農村の一軒に宿を借りた。

早朝の明け闇どきに、隣接する森の鳥や獣の声に眠りを破られる。

続いて女性の美しい歌声に完全に目覚める。急いで起きて声の主を求めれば、庭の一隅の小さな礼拝堂で読経するその家の少女(中学生)であった。

純白の釈尊の座像の前に、灯明と赤いアンスリウムの花を供え、⁽¹⁴⁾タイルの床に座って読経していた。

何か願をかけて一心に祈るといふ風ではなく、呼吸をするような自然なメロディーで、一日の始まりを告げているように見えた。

日本の暗い本堂、黒っぽい仏像と対照的な、一、五メートル四方ほどの、屋根と柱だけの小さな白い建物、正面だけに白い壁があり、白いタイルの上に安置された白い仏像、その前に供えられた、鮮やかな赤いアンスリウム、同じ仏教ながら文化の違いの大きさを実感する。

茶畑に隣接する庭で、母親から茶摘みの話を聞いていると、カバンを持った中学生の息子(読経の少女の兄)がやってきて、母の前に跪びた。

冒し難い厳肅な空気に、筆者は思わず二・三步退いた。見ると、少年は母の足の甲に自分の額を押し当てている。母は立ったまま眼を閉じ、少し前かがみになって、両手を息子の頭にそっと乗せている。

清澄な無言の祈りの行き交う数分であった。

これが毎朝の登校まえの「行って参ります」の挨拶と知った時、筆者は日本の現状を顧みてたじろいだ。

筆者にとっては、經典の言葉であった「頭面礼足」「長跪合掌」が今、眼前で行なわれている。しかも、子供から親への「行って参ります」の日常の挨拶として。

この事に強い印象を受けた筆者は、次の訪問先の州知事宅で、夫人に尋ねた。

「スリランカでは、誰でもそうします。もちろん私の子供たちも」と、夫人は微笑んで答えた。

知事は元駐日大使であり、日本をよく知る夫人の微笑みが、慌ただしく子供を送り出す日本の母である筆者にはただ眩しく、同時に内心忸怩たるものがあつた。

さらに、次の訪問先でも同じ質問を繰り返した。

医学生である彼は、「十八歳までそうしていました。今も両親に対する気持ちは同じです。今でも旅に出る時や、大切な試験の朝には、この挨拶をします」

当然のことを、何故ことさらしく尋ねるのかと、逆に問い返され、筆者は日本の現状を正直に告げざるを得なかつた。

「親孝行」は、遠い子供時代にはしばしば教えられたが、我が子には、改まって教えたことがない。「親を敬え」とは面はゆくて言えない。ただ、自分が親にしていることを、記憶にとどめて、取捨選択してくればよいと願う。

何故スリランカでは、ここまで親を敬うのか。

「両親は、生きているお釈迦さまだから」という明快な答えが返ってきた。

この考え方がスリランカの社会倫理の骨格を成している。

親は子供にこのように敬われれば、自ずから行いを正さずにいられない。子供は親に倣ってゆく。

そして、ジャータカの物語を家庭でも学校でも日常聞いて、さらに行いを正す。

それにしても、日本の登校風景とのなんと大きな隔たりであろうか。

日の出とともに起床、仏前に読経、朝食、両親に頭面礼足の挨拶、親の無言の祈り（一日よく学んで無事に帰宅できますように）を受けて学校に行くスリランカの子供たち。

今日の日本の教育現場の重い問題を解くカギをこのあたりに求めることができるのではないか。

いまひとつ書きとどめたい場面は、日曜学校である。

日曜の朝は、白いサリーの女子、白いカッターシャツの男子が、小学校低学年程度から二十歳を過ぎた青年までが、近くのお寺に集う。

講堂と思われるホールの中に、机が四・五カ所に分けて置かれ、それぞれに黄衣の僧侶が黒板を使って仏教の講義をしている。大学生程度の年齢である。

境内の木陰にも机が出され、高校生らしい少女たちが、やはり白いサリーをまとった年配の女性教師の講義を聞いていた。

白亜のストウパーの回廊では、小学生が幾組にも分かれて石畳の床にじかに座っていた。

机だけはある、やや大きい児童のグループもあれば、床にノートを置いてうずくまり、何やら手習いらしきことをする年少のグループもある。

その中に、まだ鉛筆にも馴れていない様子の男児が、何かを繰り返して一生懸命に書いている。シンハラ文字の読めない筆者は、何と書いているのか尋ねた。

「イシバタナ ミガダーヤ」と答えてくれた。初転法輪の地名であった！

かりに、貧困で就学困難な家庭の児童も、日曜学校は無料なので行ける。この国では、こうして仏教教育を受けることができるのだ。

お昼になると街は白い服の人々で溢れかえる。

日曜学校は仏教寺院だけでなく、ヒンドゥー教、キリスト教、イスラム教の各寺院でも同じように行なわれている。国立大学の広大なキャンパスの中に、これら各宗教の礼拝堂が建っていたことも、日本では考えられないことだけに、忘れられない。

パスの優先席は聖職者の席だが、かりに仏教の僧が座っていて、他の宗教の聖職者が乗って来れば、その席を譲る習慣になっている。

そしてお互いに他の宗教の批判はしない。これが鉄則だと言う。仏教徒の割合が圧倒的に多いこの国で、仏教の僧侶や仏教徒が優先権を主張しない。

紀元前三世紀のアシヨカ王の法勅が今日に活かされている。⁽¹⁵⁾

聖職者に対する在家者の尊敬は、両親に対する以上のように見受けられた。

前述の州知事は自分よりはるかに若い、まだ具足戒を受けていない僧侶にも、丁重に挨拶した。

満天の星とまごうばかりに、高くそびえるヤシの木に乱舞するホテルは、自然と共に生きるスリランカの美しさを象徴する。

かの国からの若い留学生を見るたびに、日本の轍を踏まぬようしつかり学んで帰って欲しいと切望する。

再び輪廻の話題に戻ろう。

個体は死をもって終わっても、命の流れは止まらない。

その流れに死後の命が合流する。縁が集まり、機が熟せば、次の個体として再生する。その縁や機を「偶然」に委ねず、前生での業のしからしむところと考える。

そこから輪廻転生の思想が出て来る。すなわち、この生で善なる行為を積みめば、つぎの生は、より好いものとなり、悪しき行為を積みめば、悪しき境界(趣)に堕ちる。

趣には、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天、の六趣(六道)がある。いわゆる六道輪廻である。

ところでこの思想は仏教独自のものではない。仏教以前のインド古来の思想である。

では、何故、原始仏典中、小さからぬジャンルをなすジャータカが、仏教独自の思想ではない輪廻転生を根拠とし

ているのか、その意味するところが問題となる。

釈尊は成道後、自らその境地を享受し、人々への説法は、これを行なわないことに決めておられたと伝えられている（自受用法楽）。

釈尊の到達された境地は、難解で一般の人々の理解をはるかに超えるものであり、説けばかえって混乱をもたらすであろうと懸念されたためと言う。

ところが、インド民衆の神であるブラフマー神が降って釈尊に説法を要請する（梵天勸請）。

悟りの内容が、いかに難解であろうと、数多い人々の中には、それを理解する人物もあるだろう。それが釈尊を解脱に導いたように、苦悩する人々に救いをもたらすだろうという。

梵天勸請の物語は、バラモン教の神が、新しく生まれた仏教を異教として敵視、迫害していかないことを示す。

いずれの宗教も人を幸福に導く。どの教えに拠ってよりよい人生を歩むかは、縁によるもので、決められない。

「自分の信ずる宗教のみが絶対的に正しく、他はすべて邪教である」という姿勢が争いの根源となる。

無論、梵天勸請の物語は、後世の仏教徒の創作であろうが、しかし、インド的寛容さが窺える好例であろう。

時代が下って、仏陀釈尊は、今日、ヒンドゥー教の主要神、ヴィシュヌの十種の権化（化身）の九番目とされる。

仏教の故国インドで、現在、仏教徒は一パーセントにも満たない。

では、インドから仏教は消え去ったのか。そうではなく、滔々たるインドの歴史の流れのなかに溶けこんでいるのである。

今日のインドの通貨には紙幣、硬貨ともすべて仏教徒であったアショカ王の勅を刻んだ石柱の柱頭の獅子飾りがある。

「渴スレドモ盗泉ノ水ハ飲マズ」の潔癖主義とは別の世界である。融通無碍である。

宗教に限らず、異文化に属する人々の間で、最も重要なのは「寛容」と「尊敬」にもとづく相互理解であろう。

それには自己の内の確固たる精神的バックボーンが不可欠である。まず自己の宗教なり、文化なりを真に大切なことと自覚する。

その体験を通して初めて、他者の宗教、文化が同様であることが本当に理解できる。

カルカッタで「死を待つ人々の家」を設け、貧しい人々のために生涯を捧げるマザー・テレサのつぎのエピソードは珠玉の例である。

いつものように、死を待つ人々のもとへお粥を届けると、死の床にあるその人が、お粥の半分を近くのさらに貧しい隣人に分けてあげてほしいと言った。

感動に震えるマザー・テレサは言う。

「あの神のようなダーナ(布施)の精神はどこから来るのか。それは彼らがヒンドゥー教徒だから」

そして、例のごとく

The poor is beautiful!

と結ぶ。

このように、マザー・テレサはカトリックの修道女として、最貧層のインド人(多くはヒンドゥー教徒)の救済に従事しながら、同時に異教徒である彼らを愛し、理解し、尊敬することを通じて、彼女自身のキリスト教の信仰をいっそう強め、深める歩みを進めている。

いささか傍論に陥ったが、このような他の宗教に対する寛容さ、或は深い理解に基づく宗教活動が現に存在する。

異なった宗教間で敬遠、敵視、迫害をせず寛容に認めあい、尊重しあう精神が、梵天勧請の物語を今日に伝え、さらに、仏教、もしくはジャータカにバラモン教の思想である輪廻転生を受け継がせる。

この思想が仏教倫理に抵触しないからである。

既存のすべてをラディカルに否定せず、引き継ぎ可能なものは引き継ぐ。そうすれば、いたずらに警戒心を起こさせたり、反発を招くことが少なく、人々に受け入れられ易い。

引き継ぎながら、それを発展させ、深化させ、ついには業・輪廻からの解脱を説く。

それが仏教である。

圧倒的多数である在家の人々に理解しやすく、教義と抵触せず、しかも広く社会倫理に貢献する点に、輪廻転生物語としてのジャータカの意義の一つがある。

布施

仏教はインドで約千年栄えた。

バラモン教、仏教、および、仏教とほぼ同時代に興り、やはり布施の徳を重んずるジャイナ教とによって、営々と培われた布施の徳は、やがてヒンドゥー教の時代になっても、今日に到るまでしっかりと根をおろしている。

前述のマザー・テレサの例のように、死の床にある人でさえも、恵まれた一碗の食物を他の人とわかちあう。

これはインドが数千年にわたって育んだ民族精神の賜であろう。

布施は仏教では、六(十)波羅蜜の第一項目である。

波羅蜜は paramita の音写語で、「度」(渡る、渡す)または「到彼岸」(迷いの世界である此の岸を超えて、悟りの世界である彼岸に到る)と訳す。

悟りに到るために修習すべき次の六(十)の修行徳目を六(十)波羅蜜という。一布施、二持戒、三忍辱、四精進、五禪定、六智慧(七方便、八願、九力、十智)。

出家の比丘・比丘尼も、在家の信者、優婆塞・優婆夷もこれらの徳目を欠けるところ無く満たせば悟りに到る。釈尊はこれらを完璧に全うした人である。

布施の精神は現代のインドでしっかりと生きていることを、インドで暮らした人々は見聞している。

例えば、裕福な人が店で買物をする。お釣銭は財布に入れず、店の外で待っている貧しい人に与えられる。

インドは貧しい国ではあるが、餓死する人の数は少ない。

それは富める人から貧しい人へ、また、貧しい人どうしの間で、助け合い、つまり布施が行なわれているためだと言われる。

またジャイナ教寺院などで儀式や行事があると、その都度、大規模な布施が行なわれる。

ジャイナ教徒の数は〇・五パーセントにすぎないが、大財閥が多いので、財源が豊かなのである。¹⁶⁾

筆者のインド旅行中の経験では、ホテルのボーイ氏の親切に謝して、ボールペンとライターを差し上げると、彼は即座にとりに立っていた同僚にそのひとつを分けた。その行為の自然さと速さに驚いたものである。

独占しない、分かち合う、つまり布施の徳を積むということが、これほど深く根づいていることに驚かされる。

業・輪廻の思想が生きていると言わざるをえない。

さて、全てのものごとに原因と結果がある。

現在の幸福は、過去の善業の結果であり、不幸は悪業の結果である。その過去を今生のみに限らず、誰も見たことのない前生へと遡り、未来を誰も確かめたことのない来生にまで展開する。

いま裕福なのは、前生で布施の徳を十分に積んだ結果であると考ええる。

しかしこの豊かさは無限ではない。

例えば、前生の豊富な預金も今生で使い尽くせば、来生は無一文となる。人生が今生のみならず、裕福な人は布施を

する必要はなくなる。

輪廻転生を信ずるから、来生の幸福を願って、さらに布施の徳を積む。

いま貧しければ、それは過去世で貪欲に溺れ、布施を怠った結果であると反省する。

貧しい人も布施が必要なのである。

貧富は神などの絶対者によって運命づけられるのではなく、すべて一人一人の行為（業）の集積の表れである。

あるいは次のような疑問を生ずるかもしれない。

富む人は財力があるから布施をしやすい。したがって、彼らは今生も来生も富めるものとなるだろう。

貧しいものは、財力がないのだから、布施の徳を積みたくともできない。したがって彼らは今生も来生も貧しいままとなるではないか。

結局、貧富は定められた運命であって、人間がどんなにあがいても仕方のない永遠の不公平ではないかと。

「否」である。

布施には法施、財施、無畏施の三施がある。

無一物の出家の比丘には財施はできないが、法施（仏法を施す＝偏らないものの方を伝えて、迷い、悩む人々を励ます）

はできる。

施すものが無くとも、こころを施すことができる。

たとえば宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の「南ニ死ニサウナアレバ 行ツテ コハガラナクテモイヒト イヒ」

である。無畏施である。

また、何もできない病床にあっても、看護者に、感謝の笑顔ができる。病人の笑顔が看護する者にとってどれほどの喜びであるか、誰にも経験があるだろう。これも無畏施である。

また財施は、よく知られた「貧者の一灯」⁽¹⁷⁾の物語の示す通り、額や量の多寡ではない。

実際、富む者は布施がしやすいようにみえるが、逆に物欲や執着を断つことがかえって困難だと聞く。すると、富者の巨万の布施は、あるいは貧者の一灯に等しいかもしれない。

つまるところ、金品の多寡ではなく、そのところが重要なのである。

またもし、この人生のみで、未来が無いとなれば、老いた貧しい人々や、今生で貧困から立ち上がるのが至難な社会状況にある人々は、何を希望に生きてゆくのか。虚無に堕ちるか、罪を犯すほかない。

どんなに貧困に喘いでも、未来への希望が持てればこそ正しく生き抜くことができる。その結果、むしろ安穩な人生より内容豊かな実りを結ぶことさえある。

貧困や苦境を定められた運命の如く受け入れ、清貧に甘んずる尊敬すべき人々がある。

しかし、そこにどこか消極的なあきらめの影を感じてしまうのは、筆者の冷酷さであろうか。

運命は「運ばれる命」とも、「命を運ぶ」とも読める。後者の読み方を取れば、命を運ぶ主体は自己である。

人生は運ばれるものでも、運ぶものでもなく、たゞ「このようにある」に違いないが、大いなる流れの中に運ばれつゝ、その中で同時に「運ぶ」という自由意志の存在を積極的に認識することをジャータカは示している。

未来(必ずしも死後の来生のみに限らない。今生の未来も含む)を信じて、善い畑を作り、善い種を蒔く積極的な生き方をジャータカの各物語は具体的に描いている。

ともあれ、こうして貧者も富者も、布施行、すなわち他者への思いやり、慈しみをそれぞれに可能な方法で表わすことが必要なのである。

ところで、ジャータカに描かれる布施は極めて特徴的である。

我々があつち考える布施は、寺院や僧侶に寄付する金子であり、やや進んで金品や労力の提供である。

しかし、昨年の関西大震災の後、澎湃として興ったボランティア活動は、現代の布施行と呼べるのではないか。自らの学業や職業をさしおいて、被災者の救援に挺身する人々の善意に心を暖められたのは、現地の被災者はもちろん、それを直接・間接に見聞した全ての人々であった。

まさに病める現代の菩薩である。

しかし、ジャータカにおける布施は、それらをはるかに超える。

金品、労力は言うにおよばず、必要とあらば妻子も与え、はては自分の体の一部を差しだし、それでも足りなければ、命そのものをも投げ出すという徹底ぶりである。

無論、フィクションの世界ではあるが、あまりにもすさまじい布施行に読者は息を飲む。

そのような物語を荒唐無稽として捨てず、何世紀にもわたって、演劇や美術など、さまざまな文化的手段を通じて、聞き伝え、語り継いできたインドにしてはじめて、マザー・テレサの言う「神のごときダーナ(布施)」の精神が生き続けてこられたのである。

ジャータカの登場人物

ジャータカとイソップ物語は、内容の関連性、共通性についてはしばしば指摘される。⁽¹⁸⁾

ここでは両者の異なる点に触れてみる。

イソップでは、例えば、キツネは賢い、ロバはのろまというように、登場する動物の種類に対してあらかじめ一定の性格が与えられている。

我々も、日常、「彼はキツネのように狡猾な人物だ」などと言う。

それに対してジャータカでは様子が異なる。

賢いサル、勇気のあるサル、愚かなサルが登場する。

海で遭難した人々を命を捨てて救助する慈悲深いカメが登場する一方で、おしゃべりのために命を落とす愚かなカメが描かれる。

嫌われもののヘビも、釈尊の成道の際、風雨や暑気が禪定を妨げるのを防いだ功労者⁽¹⁹⁾である。そのヘビにも釈尊の悟りを助けることとなる前生がある。

あの形状と生態のために、嫉妬や、悪の道へそのかすものとして描かれがちのヘビだが、インドでは、あの縄状の生物が一噛みで人や大型動物を殺す力のある毒に対する畏れと、それに由来する信仰がある⁽²⁰⁾。

このようにして、人間社会と同じく、登場する動物にもさまざまな性格が付与される。

そして、登場する動物の種類の多いことも見逃せない。

おびただしい種類の動物が生息するインドの風土から考えれば、自然の成りゆきとも言えよう。

しかしそこに、動物も植物も人間と同じ命を生きるもの同士としての博大な「命の共感」が、あるいは「インド的生命観」とでも呼ぶべき独特の生命感覚がある。

動物だけではない。植物も樹神として登場する。

人間の場合にしても、四姓(ヴァルナ、いわゆるカースト)のすべての階層はもちろん、アウト・カーストといわれるチャンダラ(不可触賤民)としての釈尊の前生も登場する。

社会の最底辺に生きるチャンダラと称された人々にとって、どれだけ力強い励ましとなったことか。

興味深いことに主人公は、想像を絶する布施の実行者として描かれるばかりでなく、大泥棒であったり、執着を断つことができず、何度も失敗を繰り返す愚かな農夫や、かなりの悪事を働く者としても登場する。

また、成道後、遊行中の釈尊に起こったささいな禍いを通じて、過去世に犯した罪を釈尊自ら語る。

日本の仏教では、長い歴史の間に釈尊の偉大さのみが強調されすぎて、超人化、絶対化がすすみ、この世を支配する絶対者のごとく誤解されている場合⁽²¹⁾さえある。

しかし事實は、釈尊は歴史上に実在した人間である。

極めて優れた人間が、宇宙に遍満する真理を偏りなく理解したのである。

その人間釈尊を、失敗も欠点もある実像の釈尊を、前述のジャータカは、生きいきと描き出す。無論、全体から見ればその数は少ないが、マイナス面を隠さず、両面を描いている点も見逃されてはならない。

またこれに関連して、前生物語の登場人物と現生の人物とを結び結分の中に、興味深いものがある。

釈尊の高弟であった伽葉、舍利弗、文殊師利たちが前生では釈尊の師となつて登場することがある。悟りに到つた釈尊を篤く敬いはするが、決して絶対視していない。

人間社会のあらゆる境遇で、善人となり、悪人ともなる。師となり、弟子ともなる。親となり、子ともなる。夫となり、妻ともなる。兄となり、弟ともなる⁽²²⁾のである。そしてまた、あらゆる種類の動物としての生を経験する。

それら無数の生が時間という経糸（たていと）によつて命としてひとつになる。

そして経験した無数の生は、この世界（空間）に存在する生きとし生けるもの、「一切衆生」としてひとつになる。

「一如」の世界である。

極言すれば、ジャータカは、釈尊の前生話の形をとりながら、実は一切衆生の前生話でもある。

個体として別々の生を生きながら、命としてひとつであるからこそ、そこに痛みを知り、思いやり、布施、慈悲の世界がおのずから開かれる。

したがつて、別々の生を生きる個体は、命として等価であると説く。ジャータカの代表作のひとつ「シビ王本生物語」⁽²³⁾がそれを象徴する。

あらずじは次の通りである。タカに追われるハトがシビ王に助けを求める。ハトをかばう王にタカは言う。ハトはタカにとつて大切な食料である。ハトに示す慈悲をタカにも等しく示すべしと。王は自分の腿の肉をタカに与えるべくハトの重さだけ切りとる。秤にかけるが目方は等しくならない。どんなに肉を足してもハトの重さにならない。王自身が秤にのつたとき初めて釣り合う。

この物語は王もハトも命として等しく重いことを説く。

さらに生き物は、すべからく他者の命を奪わなくては生きてゆけない事実を示す。どちらか一方だけをかばうことはできない。

王自身、生きるために既に無数の他の命に負ってきた。この事実をどうするのか。ここに命の尊さが万貫の重みをもつて明らかになる。

「私」の命はなぜ尊いか。父母の養育⁽²³⁾をはじめ、社会の多数の人々のお蔭で生かされている。さらに、数えることのできない動物、植物の命を食物として頂いている。同じ重さの命である。無数の命が私の命を支えてくれている。

また地球上に最初の生命が生まれてから人間が誕生するまでに約三五億年かかっている。さらに遡れば地球自身の誕生までに無数の年月があり、そこに最初の生命体が誕生するまでに生命の苦闘の長い歴史がある。

インドの発明による「劫」なる時間の観念は、あるいは単なる空想の産物ではなく、命の歴史の直観そのものであるかもしれない。

「私」の存在は、その劫初の命の最先端にある。そこに思いを致せば、どうして命を軽んずることができよう。

飽食の現代が、経済機構や流通組織のために、食物が自らと同じ命であることを忘れさせた。肉も魚も調理に便利なように、すっかり準備されて、きれいな切身となってラップされている。

個人的な経験ながら、筆者は、かつて魚河岸でせりにかけられる大量の魚を目の前に見て、それが累々たる屍に見え、息苦しかった。今再び注目されている金子みすずの詩「大漁」⁽²⁵⁾に強い共感を抱く。

また、家で育てて卵を産んでくれた鶏を、絞めて食べる体験も駆逐された。一世代まえには、誰もが経験したことだ。

それがいつしか自らの命の重みの認識をもにぶらせた。

現代人全体の共業の自業自得に気付かねばならない。⁽²⁷⁾

シビ王物語のように、切羽詰まった状況で、文字通り「窮鳥懐ろに入る」の場合、業や輪廻の道理をゆっくり考えたいはられない。たとえ未来に悪果をもたらそうとも、恐れず、瞬間の判断で、自ら信ずる自己の本務を果たす道をひたすら突き進む。⁽²⁸⁾

言うまでもないことながら、未来の幸福を願って善業を積むとは、小心翼翼エゴイステックに損得を計ることでない。虚仮の身ながら、真実を願う菩提心の上に初めて成り立つのだ。

ジャータカ中、いまひとり見過ごすことができない登場人物がある。提婆達多である。

物語中、悪人が登場すれば、必ずと言ってよいほどに、それは提婆達多の前生とされる。釈尊を殺そうとした彼を許せない仏教徒の気持ちは分かるが、彼に極悪人の烙印を捺すだけでは仏教の名に値しないではないか。

中勸助も「提婆達多」⁽²⁹⁾の最後を「提婆達多が救われずば、我々の誰が救われるであろうか」と結ぶ。

善人釈尊と悪人提婆を繰り返し描き続けるジャータカに、筆者はかつて辟易した。しかし、この疑問と共に歩んできて、ようやく一つの展望が開けた。

生きとし生けるものは、善悪をはじめとして、あらゆる要素を持ち、業縁次第でいかなる行為をもなすという仏教の視点に立てば、釈尊の中に提婆が住み、提婆の中に釈尊が住む。

この問いに明確に答える経典がある。

「妙法蓮華經提婆達多⁽³⁰⁾品」である。

インドの大乗仏教徒は、大正の中勘助、平成の筆者と同じ想いでこの問いに答えていた。

無量劫の昔、釈尊が國王であった時、王位を捨てて正法を求めた。一人の仙人があつて、自分は妙法蓮華經と名づく大乘の法をたもつていけると言う。王は仙人の奴僕となつて千年仕える。王はついにこの法を得て、成仏する。

この時の仙人こそ提婆達多の前身である。提婆達多が善知識となつて釈尊を正覚に到らしめた。

提婆達多の存在あればこそブッダたり得たのだ。

提婆達多はやがて天王如来となつて衆生を済度する。未来の世で妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して疑わぬ者は、地獄・餓鬼・畜生に墮ちることなく、仏前に生まれるであろうと言う。

これまで大悪人であつた提婆達多が、ここに到つて釈尊の過去世の善知識であると、釈尊自身に語らせる。

一八〇度の転換であり、大乗仏教の面目躍如たるものがある。

オウム真理教事件に関して

南伝のジャータカ三〇五話、験徳本生物語は師が大勢の弟子たちに誤つたことを教え、悪事を働かせる点で、ただちにオウム真理教の事件を連想させられる。

根本的な相異は、ジャータカでは、師の言葉に無批判に盲従するか、学んだ智慧を駆使して、師の嘘を見抜けるかの弟子たちへのテストである。

アングリマ⁽³¹⁾ラ經もまた、この事件と思ひあわされる経典である。

ジャータカやアングリマ⁽³¹⁾ラ經などの物語が流布され、深く浸透してさえいたら、と悔やまれてならない。

時代の病苦に気づいた真面目な青年たちでありながら、宗教に対するあまりの無知が引き起こした痛恨極まり無い事件である。

宗教教育の欠如が最悪の形をとって現われたとも言える。

筆者の親の世代をふりかえると、全体としては決して高学歴ではないが、娯楽である古典落語⁽³²⁾、浪曲、講談、芝居などが、結果的に、実は大きな社会教育の役割を果していたことに気づく。

筆者が小学校一年生の時、学芸会で六年生の演じた劇が奇しくも「月のうさぎ⁽³³⁾」であった。それがジャータカだと知ったのは、大学生になってからのことだが、幼い頃に初めて観た劇の強烈な印象は未だに忘れがたい。

シビ王本生物語は、かつて日本舞踊劇として花柳徳兵衛らによって東京で公演⁽³⁴⁾され、好評を博したと聞く。

知識の教育に傾きすぎ、こころの教育が急務の現代、ジャータカが果たし得る役割は、小さくないと思う。

その意味で、芥川賞作家の三田誠広⁽³⁵⁾氏の近作「鹿の王⁽³⁶⁾」を注目したい。

ジャータカの中からいくつかの話を選び出し、彼の流儀で書き直して、短編集の体裁をとりながら、全体として、一つの生命の世界を描き出すことに成功をおさめている。

倉田百三⁽³⁷⁾の「出家とその弟子⁽³⁸⁾」のような、篤い宗教的感動を呼びさます作品とは対照的に、知的で、冷静な仏教理解の道しるべとなり、従来の慣習的、因習的、もしくは迷信的仏教とは一線を画す仏教観を提供している。

ジャータカを通じて原始仏教的生命観あるいは世界観を示す好作品である。

ジャータカはこれまで主として子供の読み物⁽³⁹⁾であった。無論それは大切な役目であり、今後いつその流布が切望されるが、「鹿の王」は大人の文学としてのジャータカ存在を確かにした。このような作品が広く読まれ、さらにこの種の作品が続くよう期待したい。

それが物質的にのみ豊かになった現代に、正しいバランスをもたらずに違い無い。

まとめ

「地球交響曲——ガイアシンフォニー」という映画が近ごろヒットしているそうだ。自主上映でどんどん広がり、一番が全国六五〇カ所、三十五万人、二番もすでに二十五万人が見た。

見た人が次の主催者となっていく。この不思議な現象のカギは、ある種の「気づき」すなわち「地球はひとつながり」ということ。見たあと、誰もが優しくなれるという。

ジャータカに学ぶ筆者には、この現象は決して不思議ではなく、むべなるかな、我が意を得たり、である。

かつて、マックス・ピカートは現代を「騒音とアトム化の荒野」と呼んだ。

細分化が極限のアトム化まで行き尽くしたのか、人々は「地球はひとつながり」の事実を、知識の回路を超えて、体で直観する。そして、何よりもうれしいことに、「優しくなれる」という。

また、テレビ各局は、動物の生態を知らせる番組を放送している。環境破壊に歯止めをかける目的もあろう。

ジャータカのフィルターを通して見れば、それらの動物もみな人間と同じである。いな、人間は、それら地球に生息する動物の中の一(42)種なのだ。

「万物の霊長」と自称した人間は、霊長としての責任と自覚を忘れ、驕って、かけがえの無い母なる地球の寿命を縮めている。ガイアシンフォニーはそのことをも気づかせてくれる。

ガイアシンフォニーは、いのちの横に於ける「ひとつながり」を示してくれたが、ジャータカは、縦に於いてもまた、同じく「ひとつながり」であることを示す。

ジャータカは、従来、釈尊の前生物語、もしくは、動物寓話集という位置づけに甘んじてきた。それでも充分に社会の用に立ってきた。

しかし、ジャータカには、さらに重要な役割が秘められていた。

縦にも、横にも「ひとつながり」の生命観の提示であり、それこそが、病める現代を癒す、大いなる力である。

注

(1) 黄金伝説、ドミニコ会士 Jacobus de Voragine (1130—1198) の編纂になる膨大な聖人伝説。アジア、アフリカ、ヨーロッパ各地の異教伝承、土俗信仰を取り込みながら形成。聖人たちの伝承を教会暦に従って配列。十五世紀末、印刷術の発明と共に各国語に翻訳され、中世、聖書に次いで広く読まれた。西欧文学、芸術理解に不可欠の書。

(2) ローマ人物語集。編者不明。十三世紀末、イギリスでラテン語の原典が成立したと考えられている。ヘロドトス「歴史」、ブルターク「英雄伝」、キケロ、セネカ等の古代ギリシャ、ローマの名著、アウグスチヌス「神国論」、ソールズベリ「政治家論」等の西洋中世の代表作、「マハーバーラタ」「パンチャタントラ」等のインド古典、「アラビアン・ナイト」「カリラとティムナ」等のペルシャ・アラビアの作品、「阿育王経」「衆経撰雜比喩経」等の仏典、およびその他広範囲の古今東西の名著から引用して、聖書の教えを分かりやすく解説する聖職者のための書。「中世後期、ヨーロッパ全土にあまねく流布した、面白くてためになる読み物」(ヘッセ)、「デカメロン、カンタベリ物語、ローマの七賢などと同類のノヴェルレ」(鵜外)、「西洋中世今昔物語」(邦訳者・金子健二)。二八三話を載せ、各話に懇切な教訓的解説と註が施されている。

(3) 釈尊伝中の四門出遊部分を含むキリスト教の聖人伝。「バルラームとヨサファトの物語」池上恵子 学書房 一九九〇。拙論「バルラームとヨサファート」佛教学セミナー 二二号 大谷大学仏教学会 一九七五 等参照。

(4) 「新小説」一九一九・五

(5) 「三田文学」一九一八・九

(6) 「赤い鳥」創刊号 一九一八・七

(7) 「赤い鳥」一九二〇・七

(8) 干潟龍祥 東洋文庫論叢三五 一九五四

(9) 「ジャータカ概観」干潟龍祥 バドマ叢書二 鈴木学術財団 一九六一

- (10) 「パリー原典 Sansangata の発見」 佐々木現順 大谷学報 五四—二一九七四・九
- (11) 序分(釈尊が現在の出来事を述べ、「それは今日そうであるばかりでなく、過去世にも同じようであった」と言って、主分(過去世の物語)を述べ、結分(過去世の人物と現在の人物とを結び合わせる)で終わる。
- (12) 「業とは、宇宙的エネルギーである」「業と運命」佐々木現順 清水弘文堂教養シリーズ 一九七六
チャリー・チャップリンは晩年の名作映画「ライム・ライト」の中で、ヒロインのバレリーナ、テリーが足の麻痺で踊れなくなった時、ヒーロー、カルヴェロに次のように言わせている。「宇宙に遍満している力について考えてごらん。それが地球を動かしている。それと同じ力が君の中にもあるんだ！今必要なのはその力を使う勇氣を出すことだけなんだ」
- (13) 仏教徒七十パーセント、ヒンズー教徒一五パーセント、キリスト教徒七・六パーセント、イスラム教徒七・四パーセント。
- (14) 花が豊富なので、日本のように茎を長く残して花瓶に挿すのではなく、花の部分のみを摘んで供える。インドも同じ。
- (15) Rock Edict XII
- (16) タタやビルラ財閥等。ジャイナ教は殺生を極度に戒めるため、農・漁業、牧畜などに従事せず、商業活動を営む。
- (17) 賢愚経卷三
- (18) 注9「ジャータカ概観」六章
- (19) ムチャリンダ龍王 ウターナ二章
- (20) トルコ西部、ベルガモン(現在のベルガマ)の古代ギリシャ時代の遺跡に、アスクレピオンという病院跡があり、そこに蛇のレリーフのある大理石の柱がある。伝承に拠れば、蛇の毒が薬として役立つと予測した医師があった。ある時、訪れた重症患者が回復の見込みがなく入院を拒否され、絶望して蛇の毒の入ったミルクを飲み、自殺を図ったが、逆に回復し、図らずも人体実験となった。以来、蛇は医療のシンボルという。
- (21) 「弥勒思惟像というのは、五十六億七千万年の未来に現れ、釈迦に次いでこの世を支配するはずの弥勒が、兜率天において、じつと未来の世をどのように造るかを考えている御姿です」読売新聞日曜版 一九九六・一・二八 梅原猛「地霊鎮魂」京都もののかたり(傍点筆者)
- (22) 「歎異抄」第五章の「一切の有情はみなもって、世々生々の父母兄弟なり」という考え方は、仏教の初期からすでに開かれていた。「大方便仏報恩経」(大三三・二二四)は、釈尊の出家を親不孝と非難するバラモンに「如来は無量生死の間に一

一切衆生の父母となり、一切衆生はまた如来の父母となった。従って、如来が一切衆生のために出家したことは、そのまま一切の父母への報恩行である。釈尊を忘恩者とするのは、現世のみしか見ない狭い視野からの見解であると答え、引続き多くの前世物語を説く。

- (23) 尸毘王本生物語には二種あり、一つは本文に紹介するように、鳩のかわりに王の肉、乃至は全身を鷹に施すものであり、いま一つは両眼を施すものである。奇妙なことに南伝ジャータカは後者のみをおさめている。しかし、アマラヴァティーの玉垣やガンダーラ出土のレリーフに刻まれているのは、前者であり、こちらがよく知られている。物語は、例によって、インドラ神が釈尊の布施の心を試みるために、鳩の体重分の肉のみでなく、全身を施すことを要求し、釈尊は、それに応じる。ここに、人間の王も、小動物の鳩もいものちとして、等しいことが示される。雪山童子の捨身餌虎、布施太子の入山等の大いなる布施が思い合わされる。「ゲスタ ロマンノールム」一七四話「蛇の解放」は、尸毘王の物語と好対照を成す点で興味深い。なお、遺跡のレリーフには、つぎのような違いがある。アマラヴァティーの構図では、王自身が刀を取って右の腿の肉をそいでいる。その表情までは読み取り難い。ガンダーラの場面では、別の人物が臍の肉に刀をあてており、苦痛を隠せぬ王の表情がリアルに刻まれ、傍らの女性が王に手を差し伸べている。こちらの方が、人間的である。

(24) 偽経という説もあるが、父母恩重経（大正八五、一四〇三）参照。

(25) 金子みすず 一九〇三—三〇 山口県生 詩人

- (26) 大漁 朝やけ小やけだ／大漁だ／大はいわしの／大漁だ。はまは祭りの／ようだけど／海のなかでは／何万の／いわしのとむらい／するだろう。この作品を始め彼女は、身のまわりの小さな命、動物も植物も、時には「土」や「雪」、「石ころ」や「茶わんとおはし」の身にまでなつて、詩作をしている。たわいない童謡と軽視されかねないこれら作品が、今、脚光を浴びている。これは「まとめ」で後述するガイアシンフォニーが、現在、多くの観衆を魅了していることと、軌を一にする。余談ながら筆者の住む地元の県立図書館では数種類ある金子みすずの詩集は常に借出中で長い順番を待たねばならない。

(27) 都会から郊外に移り住む人々のあいだで、休耕田を利用した家庭菜園が作られるようになって久しい。都会暮らしの時には、スーパーマーケットでラップされた野菜を買い、外側の部分を、平気で捨てていた。しかし、自分で育てた野菜は、虫が食っていても、キズがついていても、捨てられない。欲のためばかりでなく、いとおいしいからである。自分が世話をした

ことでもあるが、おおげさに言えば、自分と時間を共にしてくれた命を戴く「もったいなさ」なのだ。最近、農業小学校の計画を耳にした。早期実現を切望する。動物であれ、植物であれ、生命の共感が人を豊かにする。

- (28) 南伝ジャータカ四九話の尸毘王の言葉は、決然としていて、「バガヴァッド・ギーター」のスヴァダルマの思想を想起させる。

(29) 中勘助(一八八五—一九六五)著 新潮社一九二一

(30) 大正九・三四b

(31) 大正二・五二二

(32) 古典落語のなかには、仏典に取材しているものがあるように思われる。

(33) 南伝ジャータカ三一六話・兎本生物語

(34) 昭和十七年七月二四日 日比谷公会堂にて仏誕・成道・入涅槃を寿ぐヴェーサカ祭の宵に上演。原作・東元多郎(慶喜)

演出・土岐俊輔 作曲・安部盛 装置・橋本欣三 照明・松崎国雄 振付・花柳徳兵衛「大法輪」第一八巻二二号(昭和二六・一二)掲載 東元慶喜著「古代インド民話集」(国書刊行会・一九八六)中の尸毘王本生物語に基づく作品は、氏の意図、すなわち「民衆のあいだに、ひろく伝えられた民話を偉大なる一個人おシャカさまの前生譚として編纂するためには、かなりの無理やこじつけがあったと思われる。そのような無理をとりのぞいて、民衆のあいだに伝えられたと思われる自然な姿にしたい」が見事に結実した珠玉の作品と呼べる。

(35) 一九四八年生れ。早稲田大学演劇科卒。小説家。「僕って何」一九七七 第七七回芥川賞受賞。

(36) 「鹿の王」菩薩本生 河出書房 一九九四

(37) 倉田百三(一八九一—一九四三)劇作家、評論家

(38) 「出家とその弟子」岩波書店 一九一六

(39) 子供のために出版された主なジャータカ

「ジャータカ物語」岩波少年文庫一〇一〇 辻直四郎・渡辺照宏訳 一九五六

「新・仏教童話全集」全八巻中の第一巻 浜田広介・中村元監修 花岡大学編集 法蔵館 一九六九

「仏典童話全集」全八巻 花岡大学 法蔵館 一九七九

「ジャータカ物語」全三巻 渡辺愛子 東本願寺出版部 一九八一

「ジャータカ絵本全集」全二二巻 ジャータカ絵本全集編集委員会編 すぎき出版 一九八八

- (40) Max Picard (一八八八—一九六五) スイスの文明批評家、「神よりの逃走」(一九三四)「われわれ自身のなかのヒットラー」(一九四六)等。

(41) Die Atomisierung Der Person 一九七一、佐野利勝訳 みすず書房 邦訳書名「騒音とアトム化の世界」

(42) 生物学者(京都市大学名誉教授) 岡田節雄氏談(要訳筆者)

生物学は最初、人間以外に何と多くの異った生物が存在することかという驚きと感動が出発点であって、生命の多様性の理解、異種間の差異と共通点の認識であった。これを生物科学と呼ぶ。ところが現代は先端技術を駆使した生体移植や遺伝子組み換えなどに代表される生命科学が盛んとなり、生物学を昆虫採集の域を出ない低いものと見なす傾向がある。ところが生命科学は human ego science の危険性をはらみ、良きものと思われてきた humanism が human egoism になりつつある。生態系維持、環境保全という現在差し迫った問題の解決のためには生物科学による種の多様性への認識と理解が急務である。

参考文献

「業論の研究」佐々木現順 法蔵館 一九九〇

「業思想の日本的受容」佐々木現順 教育新潮社 一九八一

「業の思想」佐々木現順 第三文明社レグルス文庫 二二八 一九八〇

「宮沢賢治」西田良子 林書房 一九九五

「バガヴァッド・ギーター」スワミ・プラヴァーナンダクリストファー・イシャウッド 共編 熊沢教真訳 ヴェーダーンタ

文庫 一九七〇

「黄金伝説と仏陀伝」原田実 人文書院 一九九二

(*注に掲載した書籍・文献は省略)